アベノミクスで怖いのは高値掴みではなくインフレによる財産の目減り

JR新宿駅から歌舞伎町のコマ劇場跡地にできた映画館へ向かう途中、蛍光色で揃いのベストを着た地元商店街のパトロール隊とすれ違った。

以前なら、砂糖にたかるアリのような客引きのせいで、真っ直ぐ歩くことが難しかったこの界わい。最近は客引きの姿が見当たらず、パトロール隊のお蔭で、歌舞伎町は女性や家族連れも安心して歩ける街に変わったように見えた。そんな筆者の甘い見方をあざ笑うかのような記事が、6月16日の夕刊各紙に載っていた。

「歌舞伎町で、ぼったくりによる110番急増。1～5月で前年比約10倍の1350件、4000円ポッキリと案内した客9人に、80分で266万円を請求」

こうした怖い話は、同じ歌舞伎町にあるゴールデン街では、店のお姉さんと中年客にとっては格好のネタだ。

「週末の交番は被害者で行列みたいね」

「交番に駆け込んでも、民事不介入でシカトされることが多いらしいぞ」

「示談の手付金をぼったくるニセ弁護士まで現れたのは笑っちゃうわ」

「24時間のパトロールは無理だし、ゴールデン街も、アベノミクスと円安で外国人客が増えているのは残念だな」

「私は、株も不動産も持っていないからアベノミクスなんて関係ないわよ」

「とにかく上がり過ぎ。今から買ったら、ぼったくりに遭う様なもんだ」

それって「アベノミクスぼったくり論ですか？」、そう言ってようやく2人の会話に割り込んだ筆者だが、確かに最近そんな不安をよく耳にする。

野田佳彦前首相が解散を明言した日から始まった株価上昇は、当時8000円台だった日経平均を今や2万円超えにまで押し上げ、東証一部上場銘柄の時価総額は1989年末のバブル最盛期を上回った。不動産価格の上昇も東京都心から徐々に広がり、「今買っておけば」という声が増えている。そんな状況だからこそ、「今から買うのは高値掴みでは？」なんていう「アベノミクスぼったくり論」が登場しても、不思議ではない。

ただ、ここで思い出してもらいたいのは、成長戦略や金融政策で語られがちなアベノミクスの一丁目一番地は、あくまで「インフレ期待政策」だということ。

失われた20年で、「どうせ値段が下がるんだから、あとで買ったほうが得」とみんなが考え、お金を使わないせいでデフレに陥り不景気が続いた。しかし安倍晋三首相は、「値段が上がる前に買ったほうが得」と、国民にインフレを期待させる政策で、お金の回るスピードを上げ、景気回復につなげたわけだ。

むしろ我々が心配すべきは、アベノミクスが続く限りインフレにより財産が目減りすること。仮に現在8000万円でマンション100㎡を買える場合、インフレで物価が2倍になれば、8000万円では50㎡しか買えない計算になる。目減りは、ジワリと効いてくるぶん、ぼったくり以上に怖いのだ。

ゴールデン街の中年客によれば、「客引きの誘いに乗らない」ことが、ぼったくり被害に遭わない唯一絶対の方法とのことだそうだが、インフレによる目減りから財産を守る唯一絶対の方法は、余計な現預金を手元に置かないことだと私は思う。現に筆者は、生活費2か月分だけを銀行預金に残し、残りは株や不動産などへの投資に充て、のんびりとインフレに備えている。

筆者
亀谷保孝
かめや投資経済研究所代表。早稲田大学法学部卒業後、秋田銀行入行。有価証券マネージャー、外為カスタマーズディーラーなどを経て現職。著書に「かめさん流スローな投資術」（東洋経済）「もし、あの成功した寿司屋の新人女将がキャッシュフローを知らなかったら」（秀和システム）など

Illustlation by Mari Kaneko

SYNAPSE vol.44.indd 2 2015/07/07 19:49